

民主化闘争情報

No. 809
2011年1月20日
発行 日本鉄道労働組合連合会
(JR連合)

昨年12月9日、国鉄改革以降、永きにわたりJR総連・東労組に君臨してきた松崎明氏が死去した。いま、松崎氏の呪縛から解放されたJR東日本の労務政策の行方を各界が注視している。

松崎明氏死去を受け注目されるJR東日本の労政の動向！ JR東日本は、いまこそ労政転換の英断を！

松崎氏の死去を受けて、JR総連と東労組は、3月3日14時より「グランドプリンスホテル新高輪」において、「松崎明さんを偲ぶ会」を執り行うとのことである。その案内状では、「松崎明さんは国鉄改革を一方の責任者として牽引し、その後『抵抗とヒューマンイズム』を基本とした多岐にわたる運動を通じて、JR総連・JR東労組の基本的立場を確立してきました。そのたたかいは、日本労働運動のみならず世界の労働運動にも大きな影響を与えてきました。私たちは、松崎明さんの偉大な財産を引き継ぎ、堂々と未来に向かって前進する所存です」として、JR総連が自ら「人格的代表者」と称していた松崎氏を礼賛している。

ところで、この「偲ぶ会」が、いまJR関係者をはじめとする各界の注目を浴びている。たとえば、朝日新聞のウェブマガジン「WEBRONZA」では、西岡研介氏が「JR東日本は革マル系労組と訣別できるか」と題して、以下の記事（抜粋）を寄稿している。

…（松崎氏は）87年の国鉄分割民営化直前に、それまでの対立方針を180度転換し、民営化に賛成。これを機に民営化が進んだことで「国鉄改革における労組側の功労者」などと賞賛された。その後も、民営化されたJR東日本の経営陣と10数年にわたって「労使協調路線」を取り続け、JR東日本経営陣にも多大な影響力を持っていた。だが、この松崎氏にはもう一つの顔があった。極左セクト「革マル派最高幹部」としてのそれ、である。

革マル派は63年の結党以来、中核派など他のセクトと血で血を洗う内ゲバを展開してきたが、70年代後半からは、組織拡大に重点を置き、党派性を隠して各界各層に浸透した極めて非公然性、排他性の高い集団だ。

そんな思想集団の最高幹部が率いたJR東労組・JR総連に「革マル派系の労働者が相当浸透」するのは当然の成り行きだった。特に、分割民営化以降、JR東労組が最大・主要労組となったJR東日本では、異常なまでの労使癒着によって、「JR東労組ニアラザレバ、人ニアラズ」という悪しき風潮が生まれ、それは民営化から20年余の歳月を経て、もはやJR東日本の「企業風土」になってしまった。

…彼の死去を機にJR東日本は、分割民営化以降20年余にわたって続けてきた、革マル系労組との「協調」という歪な労務政策を転換できるのか。その「試金石」となるのが、グランドプリンスホテル新高輪で3月に開かれる「松崎氏を偲ぶ会」だ。

…この「革マル派最高幹部」を偲ぶ会に果たして、JR東日本経営陣は出席するのか否か。全国の旧国鉄・JR関係者、そして治安当局関係者がその動向を注視している。

会社の姿勢の変化にヒステリックに叫びたてる東労組！

一方、東労組は「松崎明さんの遺志を我がものとし、大いに闘い・夢語ろう！」と題するコラム（東労組機関紙「緑の風」第517号）において、「23年間の労使慣行を無視して、議論もせず一方的に強行することは会社による協約の破棄を意味し、同時にこの行為はJR東労組の職場活動の排除・破壊を意図していると捉えることができる。したがって、施策を実施する一方の責任者であるJR東労組がこれを許したら、労働組合の生命を自らが絶つことを意味し、断固闘う体制を職場から確立しなければならない」と、ヒステリーを起こしている。

もはや、「人格的代表者」を失った東労組は、会社の姿勢の変化に為す術もなく、漂流していくしかないのである。